

教職員の生徒指導研修《いじめ》について
－ある小学校の取り組みを通じて－

A report of the training of the student guidance about the bullying for teachers

濱崎 伸樹

HAMASAKI, Nobuki

武庫川女子大学 学校教育センター紀要

第7号 2022年

教職員の生徒指導研修《いじめ》について
ーある小学校の取り組みを通じてー

A report of the training of the student guidance about the bullying for teachers

濱崎 伸樹*

HAMASAKI, Nobuki*

キーワード：生徒指導 研修 いじめ 児童生徒指導研修ワークシート

1 はじめに

いわゆる「団塊の世代」の大量退職の時期を経て、学校教育現場は大幅に若返っている。平成 22 年、40%を超えていた 50 代以上の教員の割合は、令和 2 年度には 5.5%にまで減少した。令和の職員室でのボリュームゾーンは 20 代後半から 30 代前半の教員である。山手台小学校は若年化の傾向がさらに強く、70%の教員が 30 代以下である。学校現場の様々な経験の継承が途絶えている中、生徒指導のスキルの継承も例外ではない。ここでは、山手台小学校の生徒指導研修の在り方について報告する。

2 若手教員の実情について

文部科学省では「チーム学校」の名のもとに多様な人材で児童生徒を育てていく、という方針をとっている。しかし、小学校では教科担任制もまだまだ進まず、一人の担任が児童を朝から下校まで指導する体制が残っている。いわゆる「学級王国」の状態である。初任者ならともかく、3 年目にもなると「今更聞くのは恥ずかしい」という意識のせいか、問題を抱え込む傾向もみられる。日常の多忙さにかまけて細かい「報告・連絡・相談」もできないままに後手後手の対応になってしまい、生徒指導事象がにっちもさっちもいなくなってしまうこともしばしばである。

3 生徒指導研修の狙い

今回の生徒指導研修は単に「生徒指導スキル」の伝達が目的ではない。若手の教員同士を「つなぐ」こと、そして「つながる安心」を感じてもらうことも大きな目的である。そのため、研修は講義形式ではなく、ワークショップ形式とし、事例も実際に起こった事件をもとにした。研修の成果を「目に見えるもの」にすることを目標として実施した。

4 研修の実際（後述の「児童生徒指導研修ワークシート」「児童生徒指導研修解答編」参照）

まず、教員一人一人にワークシートを配布し、「A 先生のまずかった言動」について線を引かせた。ここでは相談することなく個人で考えさせた。「実際にあった事象をモデルにしている。」と事前に説明したので、全員真剣に取り組んでいた。十分に個人で考える時間を与えた後は 4 人グループに分かれて意見を交流しあった。4 人の意見が合致した部分、一人だけが問題だと考えていた部分などが次第に明らかになっていく。「なぜこう思ったのか。」などの発言が自然と沸き上がり、どのグループも活発に意見交流を行っていた。次に各グループ「ここが一番まずかった」と思う点をまとめ、発表を

* 茨木市立山手台小学校校長

行った。一つの事象でも様々な見方ができること、それぞれ、生徒指導で大事にしている部分が明らかになる時間でもあった。最後に講師である校長から「解答編」を配布し、ポイントを説明した。

5 研修を終えて

研修に参加した若手教員は不適切な言動を多く見逃していた。しかし、そのことを話し合うことにより「自分だけではない」と思ったようである。また、いろんな見方ができる同僚に相談できる安心感も味わってくれたようである。この中で出てきた様々な不適切な言動は一人で問題に対応している時には往々にしてやってしまうことである。一人で抱え込まず、小さな事象もまず学年に報告、という意識が芽生えたように思う。本校は問題行動チャートをもとに組織だった生徒指導体制を作っているが、まだまだ活用しきれていない実態がある。今回の研修が「生徒指導のチーム化」の一助になれば幸いである。

児童生徒指導研修ワークシート

《ケーススタディ》

*A 先生は 6 年生の担任です。ある日、太郎さんの連絡帳に「次郎さんから暴力を振るわれているので、学校に行きづらい。」と書いてありました。早速 A 先生は太郎さんと次郎さんを会議室に呼び、事情を聞くことにしました。

A 先生「太郎さんの連絡帳に『次郎に暴力を振るわれている』と書いてあったけど、本当か？」
次 郎「・・・」
A 先生「本当か！」
次 郎「1 回だけふざけてたたいたことがある。でも、遊びだったし、太郎もたたき返してきた。」
A 先生「太郎、本当か？」
次 郎「太郎、一緒に遊んだやんなあ！」
太 郎「う、うん・・・」
A 先生「遊ぶのでも暴力はいかん。喧嘩両成敗でお互いに謝りなさい。」
次 郎「ごめんな。」 太郎「ごめん・・・」

翌日から太郎さんは学校に来なくなりました。また、次郎さんの保護者から「うちの子は遊んでいただけなのに、いじめの加害者にされた！」と校長先生に電話が入りました…。

《ワーク》

- ①A 先生の「まずい点」に線を引き、番号をつけましょう。
- ②それぞれの番号について「どんな点がまずかったのか」を書き出しましょう。
- ③それぞれの番号について「じゃあ、どうすればよかったのか」について書き出してみましょう。
- ④グループ内で交流しましょう。

【記入スペース】

児童生徒指導研修解答編

*A 先生は 6 年生の担任です。ある日、太郎さんの連絡帳に「次郎さんから暴力を振るわれているので、学校に行きづらい。」と書いてありました。早速 A 先生は太郎さんと次郎さんを会議室に呼び、事情を聞くことにしました。

A 先生「太郎さんの連絡帳に『次郎に暴力を振るわれている』と書いてあったけど、本当か？」

次 郎「・・・」

A 先生「本当か！」

次 郎「1 回だけふざけてたたいたことがある。でも、遊びだったし、太郎もたたき返してきた。」

A 先生「太郎、本当か？」次郎「太郎、一緒に遊んだやんなあ！」太郎「う、うん・・・」

A 先生「遊ぶのでも暴力はいかん。喧嘩両成敗でお互いに謝りなさい。」

次 郎「ごめんな。」

太 郎「ごめん...。」

翌日から太郎さんは学校に来なくなりました。また、次郎さんの保護者から「うちの子は遊んでいただけなのに、いじめの加害者にされた！」と校長先生に電話が入りました...。

- ①「早速」しなければいけないのは学年や管理職への報告。当事者に事情を聞く前に太郎さんからじっくりと話を聞く必要がある。日時、回数など具体的な証言を集めるのが原則。また、信頼できるクラスメートから二人の様子について聞き出しておくのも手。
- ②加害者と被害者を一緒に話を聞くのは最後の最後。両者に力関係がある場合、事実は出てこない。事実確認でも被害児童に安心感を与える手立てが大切。
- ③情報ソースをオープンにするのは絶対に NG。
- ④事実確認ができていない段階で「本当か？」と聞くのはこちらも事情を知らないことをさらけ出しているようなもの。「先生、どこまで知ってるんやろ...。」と思わせる話術が必要。
また、「本当か?!」という物言いは決めつけている、ということになる。次郎にとっては「僕の言い分を聞いてもらえず、決めつけられた。」ということになる。
- ⑤事実確認の中で言い訳や、事情を語らせてはいけない。事実ではなく、遊びか否かに論点が移ってはいけない。次郎に主導権を握られている。
- ⑥このような言い方をしたら、教師側が何もつかんでいないことを白状したようなもの。
- ⑦太郎に聞いているのに、次郎が話している。事情聴取でも指導でも不規則発言は許してはならない。教師側ではなく、完全に次郎がペースを握っている状態。
- ⑧事情も聞かず、確認もせず、いきなり指導に入っている。しかも、「両成敗」では太郎は絶対に納得できない。
- ⑨「お互いに」謝るのは両方に責任がある場合。太郎は「先生は僕の立場に立ってくれなかった...。」としか思わない。
- ⑩太郎が恐れているのは次郎の仕返しである。話の最後に安全を担保されていないので当然こうなる。
- ⑪次郎にとっても「A 先生に決めつけられた」という気持ちが大きいだろう。保護者への連絡も大切なポイントになる。